



日本名作物語

今昔物語

片桐顯智著



日本名作物語

今昔物語

片桐顯智著

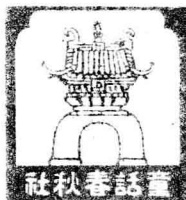


同和春秋社版

著者略歴

一九〇九年八月生れ。
長野縣人。東京大學文學部國文學科卒業。日本放送協會に入る。教養課長を経て、現在考查課長。歌人として、短歌雜誌「眞人」「國民文學」「観の木」などの同人をした。著書に「明治短歌史論」などがある。

日本名作
今昔物語



昭和二十六年七月十五日 初版印刷
昭和二十六年七月三十日 初版発行

定價 一七〇円
地方費償(運賃諸掛共)一八〇圓

著者 片桐顯智 かたぎり けんち

發行者 篠崎仙司 せうさき せんし

印刷所 日本印刷株式會社
東京都豊島区高田本町一ノ三七〇

童話春秋社 改稱

發行所

東京都新宿区市谷株會社
砂土原町二ノ七 同 春秋社

振替東京九二九九一番

まえがき

「今昔物語」こんじやくものがたりは、今からおよそ八百年ぐらい前、平安朝時代の末（一一五五年）に作られた本であります。

その名の示すとおり、話はすべて「今は昔」という書き出しで「何々となむ語り傳えたとや」で結ばれている書きかたであります。昔話を集めたもので「今は昔」とあるのをとつて、「今昔物語」といわれます。宇治大納言源隆國が編さんしたという説がありますが、たしかなことはわかりません。昔は、三十一卷あつたのですが、現在は三卷が欠けて二十八巻だけ残つております。この本に集められてある話は、佛教傳説きようでんかあもですが、民間傳説やほかの本にある話などもあり、その數は千以上にのぼつています。數からいうと、インッパやアラビヤナイトなどの世界の説話集せつわしゆにまゝつているのであります。

内容は、天竺てんじく（印度）震旦しんたん（中國）本朝ほんちよう（日本）の三部からなつています。そして、この

話のなかには、皆さんが、どこかで聞いたもの、なにかで見たものなどがたくさんあると思います。この本では、日本の話のなかから、おもしろくてためになる話を四十八ほどえらびました。題は、話の内容から私がつけたものですが、お読みなる参考のために、もつとくわしく説明しておきましょう。

第一話から第五話までは、佛教説話といわれるもので、観音様や地藏様の效目があったかであることを材料とした話ばかりです。

第六話から第十一話までは、同じ佛教説話ですが、この世の何かのできごとにあつて、佛の道に入り僧侶になる話と、因果説話といつて、善いことを行えば善いむくいがあり、悪いことを行えば悪いむくいがあるという話であります。

第十二話、第十三話は、天狗説話で天狗というものが出てくる話、第十四話、第十五話は、前の因果説話と同じであります。第十六話、第十七話は、強力説話で、力の強い人の話を集めたものです。

第十八話から第二十六話までは、藝能説話で、技のすぐれた人たちの話、特に、歌よみの話が多くあります。飛彈の工の話や紀貫之、安倍仲磨、小野篁、伊勢、在原業

平などの歌よみの話も有名な話であります。

第二十七話と第二十八話は、宿報しゆくほうといつて、佛教説話ですが、人間の宿命を材料としたものであります。第二十九話から第三十三話までは、靈鬼説話れいきせつわといつて、鬼や化物に關する話でこの時代の迷信めいしんなどもうかがわれます。

第三十三話から第三十五話は、いろいろと滑稽こっけいな話を集めたものです。また第三十五話から第三十七話までは、盗人泥棒の話ばかり集めたものです。このなかにある「袴垂はかまだね」という大泥棒の名は知っている方もいることでしょう。「羅生門らしやもん」は、芥川龍之介の小説で有名です。

第三十八話から第四十二話までは、禽獸説話きんじゅうせつわで、鷲、虎、わに、大蛇、猿、狼などの鳥けだものを材料にした話であります。

第四十三話から第四十五話までは、人情説話にんじょうせつわとよばれるもので、人間生活の人情面に取材したものです。ここには、有名な娘棄山の話がいっています。「白鳥となつた女の話」などわが國民の生活感情獨特のものがあゝると思ひます。

第四十六話から第四十八話までは、雜事でいろいろな古い説話が集められていま

す。

「今昔物語」の文章は、簡たんで美しい文章ですが、この本では和歌をのぞくほか、原文は引いてありません。しかしなるべく原文のまま口譯しましたが、それではかえって分りにくいところもでてくるので、皆さんがたのよみやすいように書き直したところもあります。

この四十八の話で、「今昔物語」を知ることができると思いますが、また、この本によってさらに原作をよむ道しるべともなつたら幸せです。

一九五一年三月

東京にて

片かた

桐きり

顯けん

智ち

目次

第一話	鷹 たか を取る男が命びろいをした話……………	一
第二話	清水 きよみづ 観音 くんのん に救われた女の話……………	九
第三話	龍宮 りゅうぐう に行つて金持となつた人の話……………	一七
第四話	観音 くんのん によつて蛇の難をのがれた女の話……………	二八
第五話	龜を助けて生きかえつた男の話……………	三五
第六話	六 ろく の宮姫君 みやひめぎみ の話……………	四一
第七話	雌 めす の鴨 かも が雄 おす の死を悲しむ話……………	五一
第八話	蛇となつたそうめんの話……………	五四
第九話	大水に母を助けた人の話……………	五六
第十話	恩がえしをした龜の話……………	五九
第十一話	すて子に乳をのませる犬の話……………	六六

第十二話 天狗にさらわれた龍の話……………六九

第十三話 天狗にはかられた僧侶の話……………七五

第十四話 冥度に行つて歸つてきた人の話……………八〇

第十五話 慾のため蛇となつた僧侶の話……………八六

第十六話 美濃狐をこらしめた女の話……………九〇

第十七話 相撲取と蛇との力だめしの話……………九三

第十八話 繪かきと大工との技くらべの話……………九七

第十九話 朱雀門のたおれるを豫言した人の話……………一〇三

第二十話 鬼にとられた琵琶の歌……………一〇七

第二十一話 伊勢の屏風歌の話……………一二二

第二十二話 在原業平の東くだりの話……………一二三

第二十三話 紀貫之の子を思ふ歌の話……………一三六

第二十四話 唐の國で和歌をよんだ安倍仲磨の話……………一三八

第二十五話 隱岐國で和歌をよんだ小野篁の話……………一三〇

第二十六話 鏡かがみを賣る女を助けた定基さだもとの話……………一三三

第二十七話 赤ん坊をさらった鷺さぎの話……………一三四

第二十八話 蛇とむかでの争う島の話……………一四〇

第二十九話 捕えられた水の精の話……………一五一

第三十話 鬼となつた母の話……………一五五

第三十一話 死んだ夫いよつとを見た女の話……………一六〇

第三十二話 女に化けた狐きつねの話……………一六四

第三十三話 きのをたべて舞う話……………一六六

第三十四話 魔法まほうをつかう爺さんの話……………一六九

第三十五話 自分の影におどろく武士の話……………一七三

第三十六話 羅生門らしやもんで死人を見た盗人の話……………一七七

第三十七話 死んだふりをして人を殺した泥棒の話……………一七九

第三十八話 朝鮮で虎にあつた話……………一八三

第三十九話 主人の命を救つた犬の話……………一八八

第四十話

蛇をくい殺した鷺の話……………一九三

第四十一話

猿の恩がえしの話……………一九六

第四十二話

狼をつき殺した母牛の話……………二〇四

第四十三話

姨棄山の話……………二〇八

第四十四話

人くい島に行った人の話……………二一二

第四十五話

白鳥となつた女の話……………二一五

第四十六話

酒泉郷に行った僧の話……………二一八

第四十七話

佐渡の人が知らない島に行った話……………二二五

第四十八話

池をこわしてしまつた國司の話……………二三八

裝幀
挿繪
羽石光志

第一話

鷹たかを取る男が命いのちびろいをした話

今は昔、陸奥國むつにくにに住んでいた男がありました。長いあいだ、鷹たかの雛ななを捕えては、鷹たかを飼う人に賣り、そのお金でくらしをたてていました。この男は、鷹たかが巢うをつくったところを前もって見定めておいてから、その雛ななをつかまえるというやり方をしていました。母の鷹は、この男のやり方に感ずいてしまったのでしよう。いつものところに巢うをつくらないで、人の通ることのできないようなところを見つけて、巢うをつくり卵を生みつけました。人間などがとうてい、行くこともできないところであつたにちがいありません。

この鷹を取る男は、鷹の雛が卵からかえり、やがて捕えられる時になつたので、いつも巢をつくる例のところに行つて見たところ、どうしたことか、今年は巢をつくつたあとさえも見えません。男は、これを見て、がっかりして、ほかの心あたりのところを見ましたが、そこにも巢をつくつてはいませんでした。そこで、さつと母の鷹が

死んでしまったのだろう、そうでなければ、どこか別なところに巣をつくっているのだらうと思いました。二、三日もついやして、山や峯のなかで、鷹が巣をつくりそうなところを探して歩いているうちに、とうとう巢のあるところを見つけることができました。喜こんで近ずいて見ましたが、人の行けそうなところではありません。上の方から下りて行こうとしても、それは手を立てたように真直まっすぐに立っている巖いわのそばなのです。下から登って行こうとしても、下の方は底も分らぬ大海の荒波が寄せてはかえしてあります。男は、やっと鷹の巣を見つけたものの、どうしても手のとどくような場所でないものですから、仕方なく家へ戻り、自分の商賣はもうだめになってしまったとなげくのでした。

そこで、男は隣に住んでいた男に、

「私はいつも鷹の雛を捕えてはこの國の鷹を飼う人に賣って、その年々のお金もうけをしてきたのですが、今年は、鷹の方が感ずいてしまったのかとんでもないところに巣をつくってしまったいました。そこで、雛をいけどることができなくなってしまったて困っています」

と、いつてなげきました。

これを聞いた隣の男は、

「人間の知恵は工夫しだいだから、とろうと思えばとることもできるんだがね」

と、いうのです。そこで、二人は連れだつて鷹の巢のあるところに出かけました。見ると巖の上に巢をこしらえているのですが、隣の男は、あわてることもなく、

「なるほど。しかしわけはないよ。この巖の頂上に杭をうちこみ、その杭に何百尺という縄を結えつけるのですな。そしてその縄のはしに大きな籠をつけ、その籠にのりながら下りていつて、巢のあるところまで行つたとき、雛を捕えることができるのだよ」

と、いいました。鷹を取る男は、この説明を聞いて、なるほどと喜こんで、急いで家へ戻り、籠や縄、杭などを用意して、また、二人で巢のある所へ行きました。

支度してきた道具をとりだして、まず杭を打ちこみ、それに縄をつけ、籠をぶらさげてから、鷹を取る男は、その籠に乗り、隣の男は上から縄をたぐりつつおろしていきしました。やつとの思いで、巖の巢のあるところまできたので、男は籠からおりて、巢

のそばに近より、まず目的の鷹の雛を捕えて、翼をとばぬようにして、籠の中に入れて、まず雛からさきに上にあげました。自分は、そのところにとどまつて、次に籠をおろした時、のぼつていこうと考えていました。ところが、隣の男はどう思つたのでしょうか。雛のはいつている籠を引き上げて、雛を手にとると、下に待つてゐる男のこなどともかまわずに、見すてて家に歸つてしまいました。そして、鷹を取る男の家に、行つてその妻や子供に、

「あなたのお父さんを、籠にのせてこうこうしたのですが、運の悪いことに、縄が途中でふつとりと切れてしまい、海の中に真逆さまに落ちて死んでしまいました。本當にお氣の毒なことをしてしまいました」

と、うそをいつたので、妻や子供は、見る目もかわいそうなほど泣き悲しみました。

一方、鷹を取る男は、巢のそばで籠がありてきたらあがろうと、今か今かと待つていますが、なかなか籠はありてきません。そうこうしてゐるうちに、日がたつていきます。また自分のいるところは、狭いばかりか少しくぼんでゐる所で、ぼんのちよつとでもからだを動かすと、はるか下の大海に落ちてしまいそうなところなのです。こ



うなると、ただ死ぬことを待つばかりでありましたが、たのみの籠はどうとうおりてきませんでした。

鷹を取る男は、長い間生き物をとる罪をつくつていたものの、毎月十八日には、身を清め観音經くわんのんきやうを讀んでいた信心ぶかい男でした。この場合になつて、「自分は長い間、空飛ぶ鷹の雛を捕えては、足に紐ひもをつないで、放さないようなことをやつてきました。この罪で、今このむくいをうけて、死ぬばかりとなつています。願わくば、大悲觀音様かんのん、長い間信心していることによつて、死んでからのちは、地獄じごくに落さないで、かならず極樂ごくらくにお迎えして下さるようにと、祈りました。すると、不思議なことに、大きな毒蛇が一匹、眼の前に現われました。その眼は、お椀わんのようで、ぺろぺろと舌なめずりしながら、下の大海から出て、きて巖のそばにいる鷹を取る男を呑もうとするではありませんか。こうなつたら絶體絶命ぜつたいぜつめいだ、と鷹を取る男は「私はこの大蛇に呑まれてしまうよりは、海に飛びこんで死んでしまつた方がいい」と、刀を抜いて、おそいかかる大蛇の頭に突きたてました。大蛇は、おどろいてのぼるところを、男は蛇の上に乗つかつて、しぜんにがけの上の方にのぼつていきました。